

# 古典古代社会の救済思想及び制度の研究

河村 将直

## 一 はじめに

諸文明の歴史の初期に溯って、社会制度や人間自体の究明を試みることは、現在を生きる我々にとって重要な意味を持つことは言う迄もない。何となれば、制度そのものの段階的な創造的發展（ヘシオドスやプラトンの如く歴史をカオス状態への後退と考える見解もある）に於ける、諸現象の変化をより詳細に検討することで、それぞれの社会に共通する人間の精神的・社会的・経済的な営みをそこに発見するからである。歴史を通じて幾度となく繰り返されてきた闘争にしても、同じ様な原因・動機で以って、似た様な結末を造り出している。時に「正義」という抽象的觀念に支えられて、支配構造の逆転も生じるが、問題は事件の要因を形成している人間自体の、社会的關係のあり方に求められる。個々の社会的意識の状態によって、歴史的に早い段階で諸問題に直面した人々の原初的な対応策は興味深く。また、所謂「古典古代」の賢人達の諸見解には、今日にあっても尚多くの研究者に光を投掛けている内容を包含している。

本論文は、時代的には古代ギリシア・ローマを焦点としており、それ故地理的にも地中海世界に限定している。

そこでは、人間が社会的關係の中で産出してきた階級的構造・差別の状態や、貧困化の問題を取り上げて、古代社会がこれらにどの様に対処し、あるいは法的な権利侵害を如何にして回避してきたかを、全般的に人間の生存に關係する阻害の状況からの救済施策として促えている。また、合わせて、人間文化の諸側面を政治・經濟・宗教等の諸分野から考察し、古代社会の全体的な把握を試みたものである。

## 二 古代奴隸制社会

古代社会に於いては、一般に比較的閉鎖的な血縁集團の内部で伝統的に繼承されてきた慣習や生活構造から、より開かれた地域的文化的形成段階へ移行するという社会的變動が見られた。それは個々の価値体系が基礎となつて、漠然とした浮動的なものが確定的なものへと變化する過程でもある。それ迄古代社会は、宗教的・形而上学的・科学的なものが混然一体となつて、人間の生活向上の目的意識を實現しようという社会的諸力を生み出してきた。獲得經濟から生産經濟への移行という「新石器革命」<sup>(1)</sup> Neolithic revolution もその一產物である。しかし、やがて様々な試行は明確な機能分化を経験し、近代文明を構築する幾つかの要素を次々と萌芽させてゆく。

「古典古代」 classical antiquity (すぐれた古典を生んだ時代の意で、古代ギリシア・ローマの総称)の時代、地中海沿岸では、諸民族の雑多な社会集團の相互の關係や異文化の交流を土台に、利害關係の葛藤をはらみながら、地域の統一、即ち群、州、国家 (ポリス polis) が漸次形成されている。次第に拡大する共同体組織と「個」の意識の發達は、村落共同体を變容させ、ポリス社会にあっては各人の利益を調整するための何らかの制度を構じる必要を生じさせた。つまり、ポリスの構成員の生活利益の保守的行動として、權利や自由あるいは平等といった諸意識が前面に押し出されてきたのである。その結果、政治への強い関心と要望から社会的参加が計られ、また法的

な社会秩序の整備、その他の知的・文化的活動が活発化して、人間生存の諸条件の確保を指向する制度的基盤が醸成されるのである。

ところが、種々の諸制度を支えている社会構造そのものとは言うのと、極めて勢力的関係の確定した厳格なる階層的支配の形態を示し、下部諸集団を土台に、弱者（敗者）に対する抑圧と搾取を正当化することで成立しているという特殊な性格を有している。対外的な国家間の利害紛争や先住民征服、及びその統治など、野蛮に獲得された戦利品は、物に限らず人間（被征服民）存在自体を制度的にあるいは私的に所有して、社会の経済的基盤を主に担わさせていたのである。

これが所謂「奴隸制社会」であり、古代社会全般に見られた極端な差別的人間阻害の状況である。奴隸（ドウロス *δούλος*）の概念は、「一種の生ある所有物」、生活のための存在（アリストテレス『政治学』一二五三・b・三<sup>(2)</sup>）であり、道具や動産の一種として、所有の客体たる「物」、生産用具の一部類として利用されていた。

しかしながら、奴隸の価値はこうした「物」としての概念自体よりも、寧ろ人間としての能力の上に設定されており、判断力や一定の知識技能の所有こそが奴隸にその価値を付与しているのである。一方では徹底した人格否認をされながら、他方利用上は家畜以上の優れて人間特有の能力に依存する、使役する側（主人 *δεσπότης*）に絶体的権能が帰属する使用価値の源泉だと言えよう。ところが、奴隸は物的使用価値を持った人間であるが故に、使用者はその取り扱いに常に意を注がなければならなかったことも事実である。プラトン *Politeia* は『法律』の中で「彼らのためだけでなく、よりいっそう自分たち自身のために、彼らに思いやりを示し、正しく扱ってやることです。」（七七七・D・二<sup>(3)</sup>）と述べており、奴隸に対する暴力的行為には反対を唱えている。しかし、それ以前のホメロス *Odyssey* の時代には、主人に対して不誠実な奴隸は残酷に殺されていた（『オデュッセイア』二二・四

六五以下<sup>(4)</sup>。主人は奴隸を所有し、奴隸労働を通して生活必需品を確保する目的に使用する上で、その労働力に全面的に依存する限り、彼等に対する扶養を輕視するわけにはいかない。奴隸維持には、やはり投下資本が必要であるし、奴隸もまた資本となるわけだが、これらを死を以て喪失してしまつては何にもならないのである。一方奴隸達にしてみれば自分達の待遇の質的水準の上下は常に主人の主觀的判断に頼らざるを得ない状態にある。プラトンの言に見る如く、主人の奴隸に対する慈悲 *ἐὐταλότητα* の觀念について述べると、解放を許可するという特別の場合を除いて、隸屬的關係を維持している範圍に於いては、ほとんどエロス *ἐρως* 的行為の結果としてのそれであつたと理解される。帝政ローマでは、厳格な法的身分に緊縛されて奴隸達は虐待もされたが、これに比較すればアテナイ人の奴隸に対する接し方が、比較的恩惠的であつたとは言える。タッカー T. G. Tucker は、「奴隸に對する人道愛が、アテナイ人の場合より優れてゐた民族としては、唯ユダヤ人種だけであつた<sup>(5)</sup>。」と述べ、貴族と奴隸の關係が妥協的・協調的だつたと評価している。

古代ギリシア社会の重裝歩兵市民層は、大なり小なりの規模で斯くの如く奴隸を使役し、独立自營の農民達は自給自足の家内生産に携わり、不自由人の労働による經濟活動に従事していた。これをオイクス *οἶκος* 經濟と言う<sup>(6)</sup>。民主政期アテナイでは、購買制度のもと奴隸労働力は広く農業・手工業・鉱業などの分野で利用され、国家の自己需要の爲の国有奴隸製作所 *ἐργαστήριον* の發展などが見られる。公共事業その他の非熟練奴隸労働による經營について、ウェーバー Max Weber は次の様に説明している。

「一般に大經營における奴隸の使用は、ただ土地が良質であつて奴隸市場の價格水準が低ければいいにのみ、実際に相當の利益をあげることができた<sup>(8)</sup>。」

しかし、現実の奴隸價格の変動は激しく、例えば戦争に伴い大量の奴隸が供給可能な時には四ドラクマイだつた

ものが、平和時には供給減のため数百ドラクマイにも上昇する。一方、肉体労働を中核とする大経営では比較的奴隷の死亡率も高く、潤沢なる供給確保が必要となる。つまり、斯かる経営は明らかに奴隷市場の供給に左右される限界を持っていた。長期に渡る供給停止の場合には奴隷に家族をもたせて、奴隷資本の再生産を彼等に転嫁した形でなされたのである。

さて、次に古代ローマの奴隷制を簡単に説明しておこう。ローマは共和政期、強大な家父長権社会のもと家内奴隷制を發展させ、異民族（シリア、ユダヤ、ギリシア、エジプト、ガリア等）征服による領土の拡大に伴って奴隷が漸増した。ギリシアに対するローマ奴隷の特徴は、大土地所有制<sup>ラティフンディウム</sup> *latifundium* と結合した大規模な農業奴隷制が發展した点にある。アッピアノス *Appianos* の『内乱』<sup>(9)</sup>を見ると、富裕者が土地を集積して大土地所有<sup>ラティフンディウム</sup>を形成し、農業生産の労働力が従来の自営農民に代わり奴隷労働が主力となっていたことが分かる、古代ローマの奴隷 *servus, servos* は公共奴隷と私有奴隷に大別され、前者は主に家事、育児、商工業、医師、文人として使用され、後者は町奴隷 *familia urbana* と田舎奴隷 *familia rustica* とに分けられて主に牧畜・農業に使用されている。奴隷は總体的に経済基盤を形成する生産労働の担い手であり、しかも彼等は児童や老人の扶養、あるいは病人看護、家事その他の諸サービスの提供者でもあった。<sup>(10)</sup>勿論、それは一般的に主体性とは無関係に、法規範の身分的拘束力に支配され、使用者との友愛的関係を望めない限りに於て、ほとんど外部からの強制力を以って引き出される性格のものである。

以上の様に、奴隷は隷属関係の支配の内で、衣・食・住を最低限確保していくためには、生涯的に被支配を屈辱的であっても受け入れ、支配者に服従し、自らの所有する能力と価値を全て吸収されていくことを余儀なくされている存在なのである。

### 三 自由・正義・権利の意識

法的身分に関する「市民団＝自由民／奴隸＝不自由民」の対概念は、地中海世界に於て一般的に兩極を示す言葉である。そもそも自由 *ἐλευθερία*, *ἀνελευθερία* と言つても、集団や社会を無視して享受できたわけでもなく、寧ろ厳格なる都市国家の管理規制は働いていた。私的生活に目をやれば、まず宗教の自由はアテナイでは見られず、国家神たる神々への冒瀆は大敬罪とされ、ソクラテス *Σωκράτης* などは、斯かる罪故に処刑されている。

また、教育の自由はスパルタにはなく、共同体的軍事組織化の目的に支配され、都市が選定した教育が実施されていた。その他、プラトンは「男子二〇歳に達したなら、三五歳までに結婚しなければならぬ。さもなければ罰金と市民権剝奪の刑をうけるものとする。」（『法律』IV・七二・B<sup>(11)</sup>）と述べ、国家統制と相対的な市民の義務は、結婚、産児制限による人口調節（『法律』V・七四〇・C〜七四一・A<sup>(12)</sup>）、養育等諸事に互っている。

プラトンの描く理想国家では、児童の自由は制限すべきもの（『国家』IX・五九〇・E〜五九一・A<sup>(13)</sup>）として掲げられ、次の様な説明をしている。

「すぐれた人々の子供は、その役職の者たちがこれを受け取つて困い「保育所」へ運び、国の一隅に隔離されて住んでいる保母たちの手に委ねられるだろう。他方、劣った者たちの子供や、また他方の者たちの子で欠陥児が生まれた場合には、これをしかるべき仕方で秘密のうちにかくし去つてしまふだろう」（『国家』V・四六〇・C<sup>(14)</sup>）

こうして徹底したエリート主義に基づいて選別された児童に対して、読み書き・竖琴・算数・天文学（『法律』VⅡ・八〇九・C〜D<sup>(15)</sup>）、音楽・芸術（『法律』Ⅱ・六五三・D<sup>(16)</sup>）、体育（『法律』VⅡ・七九五・D〜七九六・D<sup>(17)</sup>）

等が都市国家より提供される仕組になっている。

つまり、都市国家に於ける エルフセリーフ 自由とは、飽迄もポリス社会の範囲内に制約された、体制に合目的な統治理念に支配されて付随するものと理解される。とは言っても、一般に市民団の構成員達が受容していた エルフセリーフ 自由なる意識には、もっと簡明な意味が包摂されていた点も指摘できる。即ち、スパルタに代表される先住民であるヘイロータイ *hēlōtai* の如く、所有地を主人のために耕作し強制的に収獲の一部を貢納させられた、移住する エルフセリーフ 自由を奪われ土地に縛りつけられた人々に対する概念を指称していた事実である。これらの諸点を考え合わせてみると、「市民団」自由民／奴隷「不自由民」の法的身分の相対的図式に示される両極身分には、隷属的度合いがあり、これに エルフセリーフ 自由の度合いが比例している関係が成立することになる。そして、これを決定している諸要因は、諸権利（移動の自由、労働果実に対する権利、家族を持つ権利、兵役義務等）であり、それらが社会的に許容される度合いがバロメーターとなって両極概念間での位置が決められるのである。

では、古代ギリシア人にとって権利 ダイケイ *dike* の意識とそれが意味するものはどのようなものだったのだろうか。彼等にとって権利とは、元来社会の中で個人に割り当てられた地位であり、事実上は請求権を意味していた（『イーリアス』一九・一五五以下）。また『オデュッセイア』に於ては、方法あるいは慣習の意味に用いられており（一四・五九他）、ホメロスより後の時代には訴訟（事件）や正義の意となっている。<sup>(18)</sup> 例えば、ヘシオドス *Hesiodos* は『仕事の日』に於て、正義について論述をなし次の様に述べている。

「清き乙女の『正義』の神がおいでなさる、ゼウスの姫御子で、オリュンポスの神々も敬まう、高貴な女神じや。」<sup>(19)</sup>

*ἡ δὲ τε παρθένος ἐστὶ Δίκη, Διὸς ἐκγεγαυῖα, κυδὴν τ' αἰδοῖν τε θεῶν, οἳ "Ὀλύμπου ἔχουσιν".* (下線筆者)。<sup>(20)</sup>

この記述より、明らかに權利は正義（ドイツ）という概念と密接に關係していたことが分る。つまり、市民団の構成員たる当事者の上に立つ者が正義（ドイツ）（適法的正義）を基として判決を下すのである。そこには各個の法的權利の所有觀念が確認されるわけであるが、正義の概念自体はオリエントの、とりわけ古代エジプトの正義（エジプト） *maat* 思想よりも、バビロニア社会のそれに近く、更に高度で客観的なものとして効力が表出されていると言える。と言うのは、このディケーはポリス内部の法的身分の差別状況下、被抑圧者を保護し権力者に対抗する法的請求權として機能し、優れて自由市民間の社会的關係に於ける基盤を造成しているからである。所謂、古代民主政治と称され、アテナイに實現された段階的な政体やスパルタの軍事的都市国家でさえ、ディケーにより貫徹された精神は自由意識と並び敬せられたものと理解できる。その表われとして例えば、前六世紀のスパルタでは一定の持分地 *kleros* が平等に分配せられて、市民は皆等しく市民權を持ち、重装歩兵として出陣の義務を負ったが、民会に出席して国政参与の權利（ドイツ）を有していた。<sup>(22)</sup>つまり、市民權の所有は第一前提であるが、そこから派生する諸權利は配分的正義に支えられて、經濟面や国政参与の政治面及び軍事面など自然発生的に付与され、それこそが共同体的なポリスを一団となつて支えている諸個人間に「平等」意識を目覚めさせているのである。

そもそも、古代ギリシアの家族共同体の形態は、セム語系の家父長制 *patriarchalismus* 家族の構成に類似するものであるが、前九世紀または前八世紀から始まるシュノイキスモス（集住 *synoecismus*）<sup>(23)</sup>による都市国家の形成に見られた社会形態は、古代オリエントの官僚制国家体制や、他のアジアの専制君主制国家体制とは別種のもつと言えよう。ここに見られる「国家としての共同体」は、階級關係や国家權力を支える下部構造としての共同体ではなく、階級的支配の具としての国家機構Ⅱ市民の共同体という機能形態を有したものである。また、古代ギリシア社会に於ける貴族と平民の關係は、中世封建社会の領主と領民との莊園制 *Grundherrschaft* 的關係とも異



なり、両者の関係は相対的で支配・被支配で捉えられないものがある。何となれば、上述の如く市民の自由と權利(正義)、平等といった社会的諸意識が個人間に強く介在していたからである。

#### 四 古代社会の貧困問題

しかしながら、譬え中・下層市民が独立自営の農民、商人、手工業者として共通の諸權利の所有者であっても、市民間に貧富の差が歴然として存在していたことも事実である。それ故、社会に於けるディケーについてももう少し検討してみる必要がある。プラトンは、正義は人間にとって最大の価値を持つ善のイデア(相・実相・形相・容相*idea*)であると言い(『クリトン』五三・C～D、五四・B)、万人が分け持つべきアレテー(徳性*arete*)だと説明している(『プロタゴラス』三二二・C～D、三二三・A～B、三二五・A、三二九・C)。一方、アリストテレス *'Aporōdōgmos* はこれを身体的に分類しており、一定の市民当事者間でのみ問題となる正義(特殊的正義)を、(一)共同作業や共同事業による利益の「配分的正義」*dianemiktikōn* (『ニコマコス倫理学』一一三〇・b)と(二)紛争当事者間、利害関係が直接対立する当事者間での問題となるところの「矯正の正義」*diorrhotikōn* とに分けている(一一三一・a)。

斯くの如く、アリストテレスの正義思想に関して認識できることは、近代社会にあって強調された社会的正義の觀念が脱落している点である。配分的正義にしても、複数の市民の利益調整となり得ても、主として社会的弱者や貧困者の救済措置に意を注いだものではなかった。市民団に内包されて存在する貧困者達は、言わば共同体的ポリス社会からの脱落者であると看做され、貧困そのものは勤労を奨励する都市国家にあっては怠惰の結果以外の何ものでもなかった。ヘシオドス曰く「『飢え』は怠惰な人間に、常に必ずつきまとう恰好の伴侶なのだ。」(『仕事の日』

三〇二〜三〇三<sup>(27)</sup>。古代ギリシアでは、貧窮化して行く者を厳しく戒める労働観を有し、「貧困」は神ゼウス *Zeus*<sup>(28)</sup> が下し給う天罰としてあった。ただし、脱落者に対して制裁 *punishment, a legal sanction* が用意されているわけでもなく、神ゼウスは貧困者に仕打ちを加える者にも天罰を与えられると信じられていた（『仕事の日』三二七〜三三三<sup>(29)</sup>）。

しかしながら、個々の内在的倫理観や人道主義的な側面とは別に、貧困という問題が量的に拡大傾向にあって、極めて社会的に広範囲な事象として現われる場合、社会的正義が様々な形で登場して来る。例えば、ソロン *Solon* が手懸けた債務隷民化に於ける、無産者救済策もその一つである<sup>(30)</sup>。これは最早、諸個人間の倫理的・人道主義的な相救を望み得ない深刻な社会的問題としてあり、それ故彼の対策も政治の場で検証され政策・立法を以て対処されている。

一方、貧困化現象は続発し、前七五〇年頃からの地中海及び黒海沿岸の植民地活動の結果、ギリシアでは海上交易が進展し、その過程で殊に鑄貨 *nomisma* の利用が開始されて後は、手工業者 *δημιουργοί* の内にも貧富の差が徐々に拡まっていった。貴族及び上層平民は製陶・金属加工に携わり富を蓄積し、仲介商業を独占したが、都市に於てオイコス的な賊役労働者 *αἰετοπώτες* にも債務者が現われ、無産者になる者も出て来たのである。その原因についてエンゲルス *Friedrich Engels* は『家族・私有財産・国家の起源』の中に説明している。

「最盛時に全アテナイの自由市民は、女・子供を含めて約九万人からなり、これとならんで三六万五千人の男女奴隸と、四万五千人の居留民・外国人と解放奴隸がいた。したがって、成年男子市民一人について、すくなくとも十八人の奴隸と二人以上の居留民がいたわけである。奴隸の数が多かったのは、彼らの多くが工場制手工業<sup>ファクトリー</sup>で、広い室内で監督者のもとにまとまって労働していたことによる。しかし、商工業の発展につれて、少数者の

手への蓄積と集積が、自由市民大衆の貧困化が生じた。自由市民に残された選択は、自分の手工業労働によって奴隷労働と競争するか、そしてこれは、屈辱的な下賤なことだとみなされており、またほとんど成功を約束されないことであつたが、——さなければルンペン化するか、いずれかであつた。彼らは、当時の事情のもとでは必然的に後者を選んだ。<sup>(31)</sup>」

農民・商人の何れにせよ、一部富裕特権階級とも言うべき債権者、つまり自由貴族への富の集中により、無産者となるかあるいは被護民 *clientes*, *relatrys* と化している。被護民とは「主人の言葉に聴き従う者」の意で、貴族 *patria* の所領に居住する従属的農民であるが、今日社会事業の現場で使用されている「クライエント」*client* の語源をなすものである（ただし、ケース・ワーク *casework* で用いられている用語はこれとは全く別義である）。柴田光蔵氏の解説によると、

被護民とは「神々の前で解消できないかたちで誓約を結んで、保護者（パトロヌス）となる有力者のもとに自発的に身を投じて被護者となり、生活上の保護と法的な庇護を求めた……そのかわり、献身（オペセクイウム）の義務を有し、有力者の世話をし、従者として随行し、戦時にはその指導のもとに従軍し、選挙のさいにはその指示で投票を行ない、必要なときには経済的にも負担を負つた。<sup>(32)</sup>」

とされている。被護民は言うなれば、平民 *plebs* と奴隷の中間に位置し、主に市域外に居住しており、市域内の手工業者や商業に従事した自由人としての平民とも異なる。彼等は無産階級として城砦貴族と封建的な被護関係 *clientela* を結んだ者達であり、その相互関係は伝統的かつ固定化した倫理法典（例えば十二表法 XII *Tabulae*）<sup>(33)</sup> によって規制されていた。被護関係に服することは、無産化した者達に開かれた救済の道であつたと言える。彼等は主人に対し、経済的危急時に際し援助や保護、特に訴追に対する保護を要求できるなど、生存を確保する諸条件

を取得できた。その代わり、主人に対する尊敬と服従は固より、ポリスに対しても对国家義務 *munera* を負うことになる。

ホメロスの時代より、ローマだけでなくサビナ人やエトルリア人、ギリシアの古代氏族に散見された被護民であるが、先のソローンなどは、一歩進めて隸民化した下層市民を既成の被護關係からも脱却せしめ、彼はテルミヌスの神聖なる万主の土地に被護民達の為の所有権を設定している。即ち、時代の経過と共に、被護民達は主人の領地での耕作という地位の從属から解放されることを願うようになり、次に保護者 *patrons* と神々のカリタス *caritas* の御蔭で地代納入を条件に土地の占有を許可され、折柄の債務隸民化問題に直面してソローンによりその所有権を獲得できたのである。

ところが、従来氏族に從属している時代には、その保護者に扶養され生活上の必要性を満たしていた解放被護民達は、被護關係を解消するや否や生活上の必要と困難、つまり新たな生存の阻害状況に直面することになった。貧富の差は歴然として増加して、前七世紀後半からのギリシアに於て見られた中小農民の没落は激化の一途を辿っている。そして以後民主政ポリスにあって、貧困層の富裕階級への抵抗は、その政治的機構を媒介にして、とりわけ投票権 *ostracismos* なるものをめぐって展開されて行く。貧者達は集会の出席や裁判での判決に対し報酬を求めたり、投票権の売買を行った。投票の機会が多かったので、彼等はそれにより生活することが可能だったのである。民主政期、ギリシアでは貧困に喘ぐ下層階級は、富者に対して公共の出資を要求し、中層以上の者には臨時財産税 *eisphora* の祖税が課せられた。リシアス *Anaks* は「七年にわたって私は三段橈船奉仕を務め、七タラントを支払った。…そしてもう一度は四〇〇〇〇ドラクマの臨時財産税を払いもした。」と語っている。それは富の再配分的効果をなす、共同体的ポリスの一つの特徴を示している。しかし、ギリシア人達はこうして絶対的多数

の投票による政策の掌握の結果生じた、富者の財産を法的に没収する可能性に目覚めると、次に社会を大きく変革する手段に訴えた。メガラでは財産を没収された富者は国外へ追放され、扇動政治家は有産者を捕へ一部を虐殺する挙に出て、富者の財産を貧者に分配した。<sup>(35)</sup>ポリスは修羅場と化し、その結果政体は変革され、富裕層の寡頭政治 *oligarchia politeia* は、貧困下層階級が主として支配する僭主政治 *eupatris politeia* へと移行する。ソローンの改革後、アテナイに生じた三党派の主導権争いはペイシストラトス *Peisistratos* 一族の僭主制に帰着し、その支配は前五四六年に確立して三〇年余り続くことになる。

アリストテレスの『アテナイ人の国制』によると、ペイシストラトスは「緩和」で「博愛」で「寛容」、「生計に苦しむ者には仕事のために金を前貸しして農業によって暮らして行けるようにした」り、「常に平和を促し」「決して自己の利益を計ることがなかった」と称讃の言を幾つも織込んで<sup>(36)</sup>いる。しかし、ペイシストラトスの後を継承した息子達の執政はそうは行かなかった様である。都市に於ける僭主<sup>テュランニ</sup>の権力には限りがなかったため、それは容易に専横的な人民支配へと変貌し、合法的な人民の財産没収をさええなし得た。そして遂にリュクルゴス *Lykourgos* の改革を境にして、再度貴族政治 *aristokratia politeia* へと変革せしめられたのである。

さて次に特筆すべきはペリクレス *Perikles* の民主政 *δημοκρατία* である。前五世紀初頭のペルシア戦争以後の彼の一連の施策は、下層市民に政治参加の道を開くものであった。ここにアテナイはマケドニアに支配される迄、所謂「完全民主政治」*teleos demokratia* を実現している。ペリクレスはまず、宗教的公共事業とも言うべき神殿建築（イオニア式のエレクトウス *Eleutheros* やパルテノン *Parthenon*）<sup>(37)</sup>に着手し、様々な分野で手工業者<sup>デュールギヤス</sup>に職と報酬を支給し、無産者を含め多くの人々が手に技を持って工人となった。一日一人一ドラクマで、当時では四、五人の家族が何とか生活を維持できる額であった。これはサラミス海戦直後に発足した対ペルシア攻守同盟、即ち「デ

ロス *Agros* 同盟<sup>(38)</sup>を通じて、そこに寄せられた莫大な寄金を財政的基盤として、労働者の報酬が支払われている。中でも特徴的なのは各種の手当制度であり、法廷・評議会・民会への出席手当、大ディオニューロス *Liberos* 祭<sup>(39)</sup>の附屬行事としての悲劇、喜劇の観覧手当 *Neopark* 等が支給されている点である。観覧手当<sup>(40)</sup>は、特に貧困市民を限定対象として年二回、ニオボロス（三分の一ドラクマ）支給されていた。しかし後には祭事以外の時にも分配され、受給者制限もなくなっている。一家族の生計を充足できるようなものではないが、貧困者の生活を補助する一面を持った国家による扶助手当と言えよう。国庫の余剰金がこの制度の基金となっており、その国庫は主に鉱山よりの収入や中層以上の富裕者の助力によるもので、大多数の下層市民はその負担を一切負っていないかった。

伊藤貞夫氏によれば、それは「国庫に余剰が生ずるならば、それも市民全員の共有物ゆえ、分配して然るべきだとする観念は、市民共同体としてのポリスの本質に由来する考え方」であるとしている<sup>(41)</sup>。

何れにしても、貧困者に対する意識や救済に関する社会的アプローチの仕方は、度重なる政体の変革を経験することによって、ヘシオドスの時代に比べると、発展的に変化して来ていることが窺える。

## 五 共和政期ローマ社会

都市国家ローマの市民団の中樞は完全武装能力を持ち、それ故武装費用負担の可能な中産身分的性格の農耕市民層であった。既述の大土地所有制<sup>ラティフンデニウム</sup>は、もともと第二次ポエニ戦争に伴うイタリア農業の荒廃下、荒廃地を活かすために、ローマ市民に占有地を開放した国家施策に端を発し、占有地経営のための資本を有する富裕貴族<sup>パトリキ</sup>の買い占めにより始まっている。それは兵士として戦場に赴いた農民達の農地の買い取りと合わせて行われ、占有地は世襲される内にいつしか私有地に変わって行ったのである。やがて、戦争捕虜として奴隷の流入が激増すると、これを大

量に労働力として投入し経営基盤とすることで、大土地所有制度が成立している。

ところが反面、量的に豊富な奴隷労働力の活用によって生活を漸進的に阻害された、従来の経済基盤たる農民層は次々と没落して行く。斯かる状況の深刻化を憂えて、前一三三年から土地改革に着手したのがティベリウス・グラックス *Tiberius Gracchus* である。プルターク *Plutarch* によると、彼は大土地所有に對し、公有地占有量を制限し、土地を貧民に分配する再建築を取った。<sup>(42)</sup> それはローマの散文家リヴィウス *Livius* が『建国以来』<sup>(43)</sup> に示している、前三六七年の法定以上の占有地を貧民に分配せんとした、リキニウス・セクスティウス法 *Lex Licinia-Sextia* を継承する内容を有し、国防の中核たる農民層の育成を目的とするものであった。貧困化の原因は異なるとは言え、ほとんどソローンの改革に類似した施策だったと認識される。しかし、これに對する共和政の貴族達<sup>パトリキヤ</sup>の反對は、中小農民の救済者たるグラックスの暗殺により示され、前一一一年に彼が苦勞して制定した農地法は徹廃されている。その後同様の農地法が施行された例としてはカエサル *Caesar* の時代のものである(前五九年ユリア農地法 *Lex Julia agraria* ——ローの公有地 *ager Campanus* を貧窮ローマ市民二万人に一〇エゲラずつ分配した)。

ローマの政策は、市民団の総意を表明する場合、即ち民会<sup>コンクリア</sup> (*curiata, centuriata, tributa* 等)ではなく、大土地所有の新旧貴族<sup>パトリキヤ</sup>を代表する特權的元老院<sup>セナトゥス</sup> *senatus* に掌握され、統治には軍司令官でもある政務官<sup>マギストラトゥス</sup> *magistratus* を配しコントロールしていた。<sup>(44)</sup> 何となれば、グラックスの自営農民層の救済再建築を圧殺したことは、彼等の特權を利用しての自己利益追求の結果に他ならない。ところが、そんな彼等も軍隊の統制を怠ったため、つまり兵士の給与は低く、退役後の生活を保障する制度すら定められていなかったことが、兵士達の不満を募らせ彼等は有力な將軍 *Marius*、*Sulla*、*Pompeius*、カエサル等の私兵となって、覇權を巡って内乱を

生起し帝政期へと雪崩込むことになる。<sup>(45)</sup> 初代元首アウグストゥス Augustus はそれ故、退職軍人への退職金制度を設置し、そのための金庫を創設したのである。彼は大権を元老院と民会に一旦返還して、その上で国政の責任を元老院と分担している。<sup>(46)</sup>

そもそも、共和政は恣意的権力者(王)の存在を否認し、市民団統括の責任者を互選する自治の原則を打ち立てたが、実際の体制は貴族により支配されたものであった。平民は貴族の反動に抵抗し続け、徴兵・従軍を拒否したり、市外退去(前四九四年、軍事負担等の理由で債務に苦しむ平民が不満を爆発させ、一団となってローマ市外の丘に立籠り、貴族がその要求を受け入れた事件)を実施した。<sup>(47)</sup> 平民は、貴族との政治的同権を主張する富裕上層部と、生活の安定(債務奴隷制の廃止、土地獲得)を求める下層部に二分していたことも事実であるが、平民上層は他の平民をリードして貴族に様々な譲歩を迫る存在であった。平民が期待を寄せていたのは、平民のみが就き得るポストとして設置されていた護民官 Tribuni Plebis である。<sup>(48)</sup> 平民にとって救いとなったのは、保証人の獲得及び負債関係の訴訟に於て援助 auxilium をしてくれる者であった。護民官は全政務官の職務活動、元老院決議に対して発効を停止させる拒否権 veto を有し、政務官の持つ強制権 coercitio に基づく強制処分から平民を救済 appellatio するために努力していたのである。また、護民官は平民裁判 provocatio に援助を与えることもできた(援助権 ius auxilium)。

以上の様に、古代ローマの身分闘争はギリシアのそれとは異なり、即ち上層貴族対下層平民の階級闘争ではなく、共和政期を通して貴族と並ぶ社会的・経済的地位にある平民の一部上層(これを新貴族 nobiles と言う)が中心となつて、その同権を主張するといった言わば「権力闘争」と呼べるものであった。階級闘争として生じたのは、奴隷の反乱(スバルタクスの反乱)<sup>(49)</sup>や、小農民が加わった六万人によるシチリアの武装奴隷の反乱等が挙げられるだ



ろう。しかし、斯かる反乱は残酷に鎮圧されている。

## 六 古代ギリシアの結社の相互扶助

現代社会にあつては、無数の集団が存在し同時に複数の集団に分属する特徴を持っており、こうした所属作用を通じて個人の社会性も発達するようになる。しかし、古代社会であつても、生活上の相互扶助機能を有する集団的結合は、国家共同体組織の中にのみ見い出されるというわけではない。そこには無数の準拠集団 *reference group* が存在していた。基礎集団より派生する機能集団が、こうしたコミュニティを土台として器官的アソシエーションを形成している。それが結社なのである。

古代ギリシアには、この様な結社が多数存在し、国法に抵触しない範囲内で公然と、そうでない場合には秘密裏に、集会・祭祀・娯楽の場として、あるいは交友的交誼の場として機能していた。プラトンに多大な影響を及ぼした著名なピュタゴラス *Pythagoras* なども、秘教的な数術による哲学大系を持つ結社を組織していたが、<sup>(50)</sup>医学の分野で、その起源的存在としてここで見ておきたいのは、アスクレピオス *Asklepios* 医師団である。<sup>(51)</sup>それは結社と言うよりも、歴とした医療機関として把握されるが、アスクレピオス神殿を中心にアテナイには前四八〇年に建設され、最盛時にはギリシア全土に四〇〇ヶ所も設置されていた（後にキリスト教の影響により衰退している）。

その特徴は何と言っても、お籠治療と呼称される一種の心霊的療法である。病人は神殿内で祈りを行ない、そして眠っている間に、アスクレピオス神が夢中に現出して治療をするというもので、治療後、治った者達は、疾患に犯されていた部分の模型を感謝を込めて奉納するという習慣であつた。その模型は各地の遺跡から多数発掘されている。これは言うなれば、ギリシアの三分法と呼ばれる、即ちヌース *νοῦς*、プシケ *ψυχή*、ソーマ *σώμα* と

これに対応したローマのラテン語、スピリトゥス（精神 spiritus）、アニマ（魂 anima）、コルプス（肉体 corpus）の相互の關係と作用に着目した治療法であり、夢との関連を介しての精神分析的アプローチとしても、今日注目されている。例えばユング C. G. Jung もこうした研究を代表する人物である。

このアスクレピオスの流れを汲む、所謂アスクレピオス派 'Asklepiadæ' の人々の中にはかの有名なヒッポクラテス 'Hippokrates' も含まれていたが、彼は呪術的な治療と生理的（脳）な疾患に伴う病氣とを区別していた。<sup>(52)</sup> また、アスクレピオス派に見られなかった付き添い看護を用いる継続的療法は、ヘロディコス 'Herodikos' に於て始まっている。彼は種々の養生法や鍛練法を考案し、それを治療に応用していた。<sup>(53)</sup> だが、当時のギリシア人は重病看者には療養よりも死を与えてやった方が、本人の為に国家の為にとなるとし、これがアスクレピオス派によって流布された一般的な世論だったのである（『国家』四〇七・C-E）。<sup>(54)</sup>

さて、話を典型的なギリシアの結社集団に戻して、その研究に造詣の深い高山一十氏の論を参照し少し加へてみたい。

ギリシアの結社は概して、宗教的——例えばオルゲオネス 'Orgenes' 結社<sup>(55)</sup>——であるが、先のヒッポクラテスの時代には若干変化しており、職業結社の色彩を帯びて来ている。<sup>(56)</sup> 古代イスラエル社会にも、同業者組合の起源的存在としてのヒラムの王立手工業者集団があったがギリシアの結社もまた構成員の大部分は独立の自営業者であり、言わば後に中世ヨーロッパ社会で発達した同職組合の社会的な発生現象と言えよう。当時の職業結社にあっては、「同一の職業に従事する人々を共同の崇拜と社交的交友の場に結集し、友愛と共感の精神を養う機会を与えた」。相互扶助の精神で貫ぬかれ、構成員は存命中に互いの便宜を計り、そればかりでなく死んで後も死後の成員の結びつきを信じ、葬儀及び共同墓地は全て基金から負担されていた。中には女性だけの結社（女神デーメテルを崇拜

たる *Δεῦρονος* (結社) や子供の入会を許したアテナイの *Ἰόβουρον* (バックカス神を信奉) 結社、あるいはベルガモンの *ἱππαστον* (聖歌歌手の) 結社などがあった。驚くべきは、奴隷による奴隷のための結社 (スニオンの *Εραῖνος ἐραῖνος*) も存在していたのである。この様に一口に結社と言っても、種々様々な範疇により結成されていた。

結社の多くが会費を徴収していることからして、まず支払能力のある者が入会を許可されたであらうし、その生活保障的機能や相互の扶助を期待する者にとっては、その諸サービスは受益者側の負担を伴う民間団体とも言える。しかし、邪教的狂信的結社はともかく、一般にオープンで、人間尊厳的な宗教倫理規範を支柱とする崇高なものが多かったと理解される。高山氏曰く「ギリシア世界に結社の流行した時代は、政治の貧困化の時代である。国破れて山河あり、政治すたれて社会が求められる」<sup>(57)</sup> 時代であった。

## 七 帝政期ローマのアリメンタ制度

前一三三年のグラックスの改革に始まる共和政期の内乱、殊に前八八年以降の軍閥の勢力争いと各地の奴隷の反乱は、言わば旧体制としての都市国家が世界ローマへと変貌して行く過渡期であった。氏族団体や家産制的な大家族も解体傾向にあり、政治上の結果や国家への献身の気風は崩れ、各自はそれぞれの生活を守護するために奔走していた。そうした社会情勢の中で生まれて来た児童達もまた、悲惨な状態に放置され、次世代を担う者達であるが故に、社会の将来は誰の目にも不安この上ないものであったのである。カール・カウツキー *Karl Kautsky* は、当時の様子を次の様に説明している。

「孤児達は、取り分け此状態の為に苦しんだ。両親を失ふ事は、今や彼等を無防備のものとした、彼等の世話をする者は誰もいないのである。快く扶養する親類を有しない多くの子供達は、一般的窮乏と犠牲の精神の低下

とが家族的負担を逃避する者の数の増加を招来しつつあった事実によって、一層数を増した。<sup>(58)</sup>

やがて、地中海世界を統合することに成功したアウグストゥスが直属の軍隊の統帥権を掌握、また元老院<sup>セナトゥス</sup>との共同統治形態を持つ元首政 principatus を実現し、共和政期は崩壊する。それ以後の帝政期は、「ローマの平和 Pax Romana」と称される時代を招来している。<sup>(59)</sup>

そこで、内乱後の体制の建直し政策の一環としてアウグストゥスが着手したのは、上述の児童達、即ち親類縁者の扶養を得られない児童や貧困家庭の少年少女達を何とか救済するための措置 (almus) を実施することであった。それは労働力と兵士としての必要性から、将来的展望を有するローマ帝国の基盤固めに不可欠な施策としてあり、貧窮児童の救護育成を国家主導の下に実施することになった。これをアリメンタ alimenta 制度という。例えば、アウグストゥスの時代のものとしては、次の様な養育施設への寄付があった。

「奉行職だったヘルギウス・バジラは、ラティウムなるアテナイの市民に、不幸にして其数は記していないが、或数の児童に穀物を供給する為に、八万八千マルクを遺贈した。<sup>(60)</sup>」

貧困児童の扶養にあたっての財源は、大別して公立と私立の基金が設置されている。この施策は次の皇帝ネルヴァ Nerva にも継承されており、更にトラヤヌス Traianus 帝の時代に至り拡張整備されている。ローマ市内に於て五千人近い児童が、皇帝金庫から直接的に支出された基金で扶養されていた。

以下は、当時の実態を示す、ウエレイアのアリメンタ碑文(一〇九年)であり、公立の制度に関する記録である。

「総額一、〇四四、〇〇〇セステルティウスに達する不動産債務関係、これによって至高にして最善なる元首・最高司令官・カエサル・ネルヴァ・トラヤヌス・アウグストゥス・ゲルマニクス・ダキウスの寛大なる思召に従い、少年少女たちが扶養費を以下のように受け取るように。

嫡出男子 二四五名月額一人当り 十六セステルティウス

小計(年額) 四七、〇四〇セステルティウス

嫡出女子 三四名月額一人当り 十二セステルティウス

小計(年額) 四、八九六セステルティウス

庶出男子 一名小計(年額) 一四四セステルティウス

庶出女子 一名小計(年額) 一二〇セステルティウス

これらの総計は五二、二〇〇セステルティウス、これは上記の元金の五パーセントの利率にあたる。

ガイウス・ウォルムニウス・メモルとウォルムニア・アルケは彼らの解放奴隸ウォルムニウス・ディアドゥメヌスを通じて、クインティアクスとアウレリアヌスの農地と、森のあるムレタスの丘を登録した。この区域は、ウァレリア領内のアムビトレビウス区にあり、マルクス・モムメイウス・ペルシクスの所領、公道に隣接している。評価額一〇八、〇〇〇セステルティウス。彼は八六九二セステルティウスを受け取り、上記の所領を抵当として設定すべきである。(以下略)

(一〇二年以前の債務関係)

同様に、コルネリウス・ガリカヌスによってなされた不動産債務関係は総額七二、〇〇〇セステルティウスに達する。これによって、至高にして最善なる元首・最高司令官・カエサル・ネルウァ・トラヤヌス・アウグストゥス・ゲルマニクスの寛大な思召に従って、青少年女たちが扶養費を以下のように受け取るように。嫡出男子、

一八名、(月額)一人当り十六セステルティウス、小計(年額)三、四五六セステルティウスになる。嫡出女子(月額)一二セステルティウス、両者の総計は三、六〇〇セステルティウスになり、上記の総計に対する五パーセントの利率に相当する。(以下略<sup>(61)</sup>)

まず「寛大なる思召に従い」という記述が目につくが、これは古代エジプトの「教訓」書簡類に見られた、あるいは古代バビロニアのハンムラビ Hammurapi 王の法規集の序文及び結文を想起させる。支配者の上からの強烈な慈悲観念を示す言に等しい。また、支給額の男女差別等は、家父長権社会に典型的な社会意識の表出として、更にこれに関係して、嫡出か庶子かの違いに基づく支給年額の差異等も、伝統的価値観やそれに伴う社会構造に帰因していると言える。しかし、ローマ帝政初期の生活費に於て、一般に年収が一万四〇〇〇セステルティウス、月額にして約一二〇〇セステルティウスで、つましく暮せたこと。また麦粉一モディウス(四升七合)について一〇セステルティウス。年に一人で六〇モディウス、月に直して五モディウス食すると言うから、金額では一人五〇セステルティウスかかる。つまり、食費として最低必要額の三分の一、四分の一しか満たしていないという低劣な支給水準であったし、そうしてみると様々な価値観に由来する支給額上の差別も激しかったと言わざるを得ない。ネルバ・トラヤヌスの時代には、この様に国家が直接数個の所領を購入し、それらを転貸したり、あるいは低当にして譲渡せしめるという方法で、賃貸料または抵当の利子で以って施設を運営していたのである。

では次に、私的なアリメンタ制度に関して、資料としては二世紀のタツラキナの文書を引用しておこう。

「ガイウスの娘カエリア・マクリナは遺言によって三〇万セステルティウスでこの記念碑が建立されるように命じた。その装飾と維持のために……セステルティウスを遺した。また同様に、彼女の息子マケルの思い出のために、タツラキナの人々に一〇〇万セステルティウスを遺した。これは、その金額から利子収益によって、一〇

○人の少年（と一〇〇人の少女と）に扶養を目的として、毎月在住少年一人当り五デナリウス、毎月在住少女一人当り四デナリウスを、少年は十六歳まで、少女は十四歳まで、費用が与えられるためである。かくのごとく、一〇〇人の少年と一〇〇人の少女が相次いで絶えず受け取るべきである。<sup>(62)</sup>

マクリナが、貧困児童の救済資金に当てる目的で寄贈した一〇〇万セステルティウスという額は、当時の上流社会層、即ち元老院階級の資格財産に等号する額である。因に、中流騎士階級の資格財産が四〇万セステルティウスであった。ローマの資産家の中には、その後継者のあるなしを問わず、相続すべき財産の使途は、所謂「不幸なる子供達の為に」といった慈悲的観点から児童扶養の諸制度へ、あるいは「社会の為に」という公共面で役立てる用途を願って、自らの財産を贈与する者が出て来ている。斯かる現象は今日でも見られることだが、制度的に歴史上展開されてくるのが、帝政期以降のローマ社会や中世期のヨーロッパ社会であり、殊にキリスト教精神の滲透に伴い、宗教色を混合して漸進的に拡大していった私的な慈善・救済行為と言えよう。そして、こうした私的なアリメンタが、先の公的なアリメンタ制度の低劣な給付水準を始めその他の運営諸経費を補足することで、ローマのアリメンタ制度は成立していたのである。

## 八 結語に代えて

ヨーロッパ文明を形成し、その社会経済史の基盤となる潮流は、オリエント世界と地中海世界より発している。両者の文化的・社会構造的な差異については、本論文中にも若干触れているが、斯かる両世界の融合は、北方マケドニアの大王と呼ばれたアレクサンドロス *Alexandros* <sup>(63)</sup> の世界帝国の建設に伴い実現している。地中海の領域国家に導入されたオリエント的思想や社会様式は、ヘレニズム世界として開花する。更にそれが、後にゲルマンの上

代社会とキリスト教精神に色彩られて、中世に至り「ヨーロッパ世界」の原型は固められて行く。

所謂、古典古代と称される古代ギリシア・ローマの兩時代、都市国家の段階に到達した共同体原理は、オリエント諸民族とは異質で固有のものであった。個の意識に支えられた市民権その他の権利の主張を有するギリシア・ローマの社会に見られた構成員の結合は、オリエントの専制君主下の共同体的結合に比較すると、より民主的に映じる。しかし、實際デモクラシーの名の下に展開される奴隸制の社会形態は、本質的に極端で矛盾した人間の内面の露骨な表出に他ならない。強者が「英雄」視される武装市民団にあって、人間の利害關係の葛藤を武力に訴え、敗者は容赦なく勝利者の足下に踏躪られ隷属的に緊縛される現実。奴隸という使用価値が設定された人々に於ては、最早生きる術は自らの労働力の拒否不可能な状況下での提供しかない。この点ではオリエントと地中海の兩世界の別はなく、古代社会に共通する典型的な人間の生存阻害を示しており、社会の下部構造の持つ一面と言える。

一方、古典古代の社会に於ける貧困化の現象は、何らかの扶養を受けることのできた奴隸や被護民クリエンテスよりも、寧ろ独立自營の自由下層市民や解放された被護民や奴隸の上に生じている。彼等は富裕貴族層パトリキヤの势力的な利益追求の余波を、直接的に被った者達であった。農民達は大土地所有制の前に没落し、無産者となるか、債務のために隸民化して行く。また、生産の諸条件を土地所有以外に、貨幣經濟の滲透する過程で、手工業や對外貿易の中に生業を見出す者も、都市を中心に増加していった。だが彼等とて農民と同様に、奴隸労働力の大量流入による貴族パトリキヤの独占商業のために、無産者へと埋没してしまつた者達であった。

もともと、都市共同体の内部では、怠惰以外の名譽ある戦死者や戦傷者に対し、生活の困窮に際し親族相救の望めぬ場合には、市民共同体の相互扶助をポリスが中心になつて機能行使していたが、より広範圍な貧困の社会問題化には、構成員の脱落防止のために救済措置アルムスがとられた。それは時に債務關係の法的な解消として実施されたが、



救済策のほとんどは土地の分配による生産手段の実質的提供に集中している。あるいは、力関係の支配する社会にあって、しかも政治機構が重要な役割を果し得た段階には、これを媒介にした社会的変革が生じ、僭主なる者が一時的な救済者として登場することもあった。更にギリシアでは民主政の完成期に至り、都市に於ける貧困層を対象に職の提供や扶助手当が、国庫からその資金が供出され、ポリスを主体として実施されている。貧民の救済は今や体制維持に不可欠な政策の一つとして、ローマの如くアリメンタの名称で制度化の実現が見られたのである。

最後に、古典古代の盛時の経済は、ローマ貴族のラティフンディウム経営にしても、エジプトに見られた様な製油業の国家の独占<sup>(64)</sup>にしても、言わばそれらはオイコス経済の拡大形態だと言える。商工業の同職組合的結社なども、生産的庶民の自発的団体としてあったが、合理的企業に展開することもなかった。それらは階級的支配の中で、国家に統制された経済としてあったのである。また、戦争・略奪による一部特権的貴族や新貴族に蓄積された資本は、企業や国民的・生産的産業資本に転化されることもなく、主として祖税請負・高利貸・宝石商等の金融業の非生産的な投資がなされ、結局、地中海世界の資源の消耗を招来して、都市は没落して行くのである。

#### 注

(1) V. G. Childe, What happened in history, New York, 1986, pp. 55—76.

(2) Translated by John Warrington, Aristotle's Politics and Athenian constitution, 1961, London, p. 10. (以下、Ar) 『アリストテレス全集』第十五巻

岩波書店、一〇頁。

(3) Translated by A. E. Taylor, Plato, The Laws, 1969, London, p. 160. (以下、Pl) 『プラトーン全集』第十三巻、岩波書店、三七八頁。

(4) Translated by S. O. Andrew, Homer's Odyssey, 1967, London, p. 289. 吳茂一訳、ホメロス『オデュッセイアー』下巻、岩波文庫、三〇九—三一〇頁。

- (5) 田中秀央訳、T・G・タッカー『古代アテナイ人の生活』(一九四六年、全国書房、六〇—六一頁)。
- (6) Translated by R. I. Frank, Max Weber, *The Agrarian Sociology of Ancient Civilization*, 1976, pp. 42—43. (Clarendon Press, M. W)
- (7) 『世界歴史』古代Ⅱ(一九七三年、岩波書店) 四〇七頁。
- (8) M. W. p. 55.
- (9) 古山正人他編訳『西洋古代史料集』(一九八七年、東京大学出版会) 一二五—一二六頁。
- (10) 例えば、児童の教育に関して、家庭教師は解放奴隷から選択され、教養の深さから、特にギリシア人が好んで用いられた(藤沢直郎訳、I・モンタネリ『ローマの歴史』、中央公論社) 十三頁。
- (11) Pl. *The Laws*, p. 105.
- (12) Pl. *The Laws*, p. 123.
- (13) Translated by A. D. Lindsay, *Plato's Republic*, 1969, London, p. 293.
- (14) Pl. *Republic*, pp. 149—150.
- (15) Pl. *The Laws*, p. 194.
- (16) Pl. *The Laws*, p. 30.
- (17) Pl. *The Laws*, pp. 178—180.
- (18) 松坂佐一『プラトンと法律』(一九八七年、名古屋大学出版会) 七頁。
- (19) Liddle and Scott, *Greek-English Lexicon*, 1986, Oxford, pp. 202—203.
- (20) 原典が掲載されている。Edited by T. A. Sinclair, *Hesiod, Work and Days*, 1979, New York, pp. 29—30. (以下、He) 松平千秋訳『仕事の日』、岩波文庫、四二頁。
- (21) right and truth の意。E. A. Wallis Budge, *Egyptian Language*, London, p. 227.
- (22) 伊藤貞夫『古典期アテネの政治と社会』(一九八二年、東大出版社) 六二頁。
- (23) 住民の移動があり、小共同体はより大きなポリス共同体に統合された。
- (24) 前載『プラトン全集』I 一四七—一四八、一四九頁。
- (25) 同右、VIII 一四〇、一四一、一四四—一四五、一五三—一五四頁。
- (26) Translated by David Ross, *The Nicomachean Ethics of Aristotle*, 1972, Oxford, p. 111.
- (27) He, p. 34. *ἡμεῖς γὰρ τοὶ πάντες ἀεὶ ὁρῶντες ἀνθρώποις*.
- (28) ギリシア神界の最高神、神話ではティーターンのクロノスとレアの子(高律春繁訳、アポロドーロス『ギリシア神話』、岩波文庫、二九—三〇頁)。

- (29) He, pp. 50—51.
  - (30) Ar, Athenian Constitution, pp. 249—256.
  - (31) Friedrich Engels, Der Ursprung der Familie, des Privateigentums und des staats, 1977, Berlin, SS. 133—134. 戸原四郎訳『家族・私有財産・国家の起源』、岩波文庫、一五七頁。
  - (32) 柴田光蔵『ローマ法概説』（一九八一年、玄文社）一一八頁。
  - (33) 第八表第二「保護主<sup>patronus</sup>もし〔その〕庇護民<sup>clientes</sup>を欺きし場合は、呪わるべし」。
  - (34) 前載『西洋古代史料集』、一二四頁。
  - (35) Ar. Politics, p. 143.
  - (36) Ar. Athenian constitution, pp. 258-259.
  - (37) Antony Andrews, Greek Society, 1984, New York, pp. 120-121.
  - (38) アポロン<sup>Apollon</sup>の生地、ホメロスの時代には神事同盟、僭主の時代は海洋国家同盟の会議場となった（高山一十『ギリシア社会史研究』、未来社、一六五頁）。
  - (39) パッコスとも言う。トラークア・マケドニアの宗教的な狂乱を伴う儀式の神（吉田敦彦『ディオニュソス』『思想』六六一号、岩波書店、五八一—七五頁。
  - (40) Greek-English Lexicon, pp. 364-365.
  - (41) 前載『古典期アテネの政治と社会』、一二七頁。
- 古典古代社会の救済思想及び制度の研究
- (42) 前載『西洋古代史料集』、一三八頁。
  - (43) 同右、一二六頁。
  - (44) Donald Dudley, Roman Society, 1985, New York, pp. 37-41.
  - (45) 弓削達『ローマ帝国の国家と社会』（一九八七年、岩波書店）九頁。
  - (46) 国原吉之助訳、タキトゥス『年代記』上（一九八六年、岩波文庫）一四頁。
  - (47) 前載『ローマ法概説』、一二〇頁。
  - (48) 前載『年代記』上、三九六頁。
  - (49) アッピアノス Appianos の『内乱史』に詳述されているカプアの剣闘士奴隷養成所にいたスパルタクスの蜂起（前掲『西洋古代史料集』一四二—一四三頁）。
  - (50) 鈴木幹也訳、ジャン・ブラン『ソクラテス以前の哲学』（一九八五年、白水社）三九—五八頁。
  - (51) 村上陽一郎編『医学思想と人間』（一九七九年、朝倉書店）一四—一五頁。
  - (52) 小川政恭訳、ヒポクラテス『古い医術について』（一九八五年、岩波文庫）三八—五八頁、五九—八四頁。
  - (53) Pl. Republic, p. 90.
  - (54) Pl. Republic, pp. 91-92.
  - (55) 「神と英雄を称えて集合する人々」の意（前掲『ギリシア社会史研究』、二六二—二六三頁）。

(56) この頃、家族内に限られていた秘密技能は、所謂「徒弟制度」に伴って、家族以外の弟子にも伝授されるようになった。ギリシア時代は医師の免許制度がなかったので、医学の知識を有し医師の経験を有する者は自由に開業することを許可された。ただアテナイに関しては、官医は市民會議で選出されている。

(57) 前掲『ギリシア社会史研究』、一五一頁。

(58) 近藤宗男訳、カール・カウツキー『基督教の発生と古代無産階級』（一九二九年、社会評論社）一九五頁。

(59) 五賢帝（ネルヴァ・トラヤヌス・ハドリアヌス・アントニヌス・セピウス・マルクス）アウレリウス・アント

ニヌス）の治政（Roman society, pp. 189-192.）

(60) 前掲『基督教の発生と古代無産階級』、一九七頁。

(61) 前掲『西洋古代史料集』、一七四—一七五頁。

(62) 同右、一七五頁。

(63) 在位前三三六—三三三年（鶴見祐輔訳、ブルターク『英雄伝』武將の巻、第一書房、五—一七頁）。

(64) 生産から販売までが、<sup>ノミナトス・コロニー</sup> 県・群・村の官僚機構に独占管

理されていた（前掲『西洋古代史料集』、八二—八四頁）。

（大学院社会学研究科博士課程後期・社会学・社会福祉学専攻）